

文化財修理設計技術者、井上梅三の手掛けた建築

山田由香里

1. はじめに

井上梅三（1894-1963）は、松江城天守修理工事（1950-55）の技師で、修理工事で得た知見を詳細に書き残した。これらの知見は、松江城天守再考の重要な基礎資料となり、2015年の国宝指定に結びついた⁽¹⁾。梅三の資料は、島根県江津市渡津町の自宅を2004年4月に解体したときに蔵から発見された。資料は、松江城天守の他に、東北から九州、朝鮮半島の広域の寺社の修理や設計に関する約1300点からなる⁽²⁾。これらは、大正・昭和の時代を示す貴重な資料である。本稿は、井上梅三の資料の理解を深めるために、手掛けた建築と背景について報告する。

2. 出身地—江津市渡津町

井上梅三作成の履歴書によると⁽³⁾、生れは明治27年（1894）3月20日で、出生地は島根県那賀郡江津町字渡津1152（現、江津市渡津町）である。ここに先の蔵があった。江津では嘉戸と呼ばれる地区で、敷地は北面と東面が道路に面する角地に位置する。東面の道を北に進むと八幡宮があり、昭和11年（1936）建立の石鳥居の寄進者に井上梅三の名が刻まれる。墓所は八幡宮の東にある。井上家の屋号は井筒屋で、梅三の戒名は浄念院釈正覚、没年は昭和38年（1963）12月15日である（図1）。

渡津は、島根県の中央部を流れる江の川の河口右岸に位置する。明治5年（1872）の「渡津村村誌」⁽⁴⁾からみえる明治初期の渡津は、山がちで農耕地が狭く、漁業及び回船業が盛んであった。この環境は、手に職をつけることにもつながった。島根県建築士会江津支部の梅田賀千氏によると、渡津出身の建築技術者は、井上梅三の他、江戸時代の大工棟梁山藤万兵衛藤原安国、吉阪隆正設計の江津市庁舎（1962年竣工）の工事を担当した坂根正夫（江津市役所）がいる。渡津町は今も2千人強の人口規模であるから、優れた建築技術者を多く輩出したと言ってよい。

3. 出身校—東京工科学校

履歴書の学歴に、大正7年（1918）7月東京工科学校建築科卒業とある。梅三24歳の夏である。上京はそれより早く明治43年（1910）4月で、16歳で建築設計施工の古島工務所で働き始めた。



図1 井上家墓所（江津市渡津町）

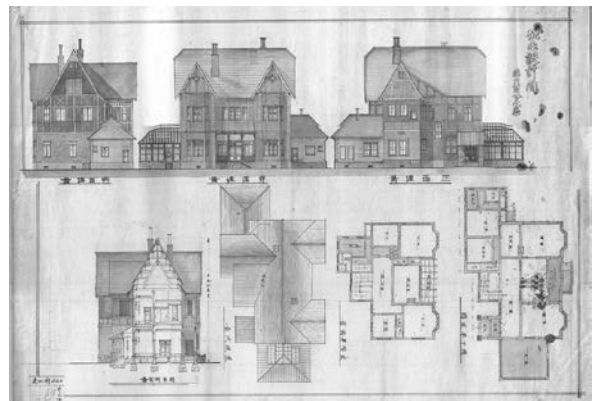


図2 東京工科学校の課題図面（洋風住宅）＊

東京工科学校は明治41年（1908）に、小石川水道端町で開校した。梅三が入学した大正期は、東京市神田区錦町3丁目に校舎があった。学則によると⁽⁵⁾、機械、電工、建築、採鉱冶金、土木の5科からなり、修業年限は2年4学期で、3月と9月が学期開始。授業時間は1年生が午後1時と午後6時から3・4時間、2年生が午後6時から3・4時間で、働きながら通学が可能だった。1年生は全科共通科目で、修身、英語、作文、算術、代数、幾何、物理、化学、製図などを学ぶ。2年生から建築科の科目が始まり、前期の3学期は材料強弱、日本建築、構造、測量、製図、後期の4学期では建築材料、施工法、透視画自在画が加わる。学校の趣旨には、「各種階級の技術者を要すること頗る急なり、殊に専門技師と職工との間に立ちて作業実施の任に当る者を養成するは現時の状態に於て急務中の急務に属す、（中略）各種工学の知識を授け技術者として堅実なる品性を陶冶するに務む」とある。建築でいえば、建築技師と現場職人の間に立つ設計監理者の養成を目指した学校である。

資料には、工科学校時代の課題図面が含まれる。図2は住宅設計図で、ケント紙に墨入れ着色され、4学期に描いたものである。柱や梁の骨組を外観に表したハーフティンバー式の2階建の洋風住宅で、平面図、立面図、屋根伏図、断面図からなる。他に、税務署設計図、暖炉詳細図、階段詳細図、門設計などの課題図面がある。当時の大学や工科学校の建築科は、こういった洋風の建築図面が描ける技術者を養成していた。建築科の主任は、武田五一と大熊喜邦が務めていた。

4. 手掛けた建築

梅三の履歴書の職歴から、手掛けた建築を地図に示した（図3）。現時点で確認した資料総数は1344点で、内訳は図面が582点（43%）、冊子が94点（7%）、一紙切抜が167点（12%）、写真が422点（31%）、書簡日記等が79点（7%）である。資料の74%を占める図面と写真は手掛けた建築のもので、貴重な建築資料である。

資料の保存・活用のために、現在も資料の整理を継続しており、建築ごとにどのような資料があるかは機を改めて報告する。今回は、梅三が履歴書で紹介する建築をなぜ手掛けることになったのか、背景



図3 井上梅三の手掛けた建物位置図＊

を探りたい。

①神野寺表門修理工事主任（大正7年10月19日～同8年2月28日、千葉県君津市鹿野山、国重要文化財）、同本堂大修理・楼門再建工事現場主任（大正8年4月1日～同9年9月30日、本堂は県指定有形文化財）

神野寺は、上房総最高峰の鹿野山頂に位置し、聖徳太子が創建した関東最古の名刹であるという。表門は、本堂奥の客殿に通じる門で、永正年間（1504～1521）にここで真言宗を開いた中興1世弘範上人のときのものとされる。柱・組物・木鼻に禅宗様の様相を見せ、貴重な建築である。大正5年（1916）に古社寺保存法に基づく特別保護建造物に指定された。本堂は、境内伽藍を再興した中興14世法印利珊によって、宝永7年（1710）に完成した。方5間の入母屋造で、正面に唐破風の向拝をつける。彫刻は近世の特徴を見せる。内陣の厨子に軍荼利明王と薬師如来を祀る。

大正6年（1917）9月30日の台風によって、表門と仁王門が倒壊し、本堂が大破する大きな被害を受けた。梅三が関わったのは台風被害の復旧工事で、表門と本堂を修理し、楼門（仁王門）を再建した。本堂は、修理以前は茅葺で正面の唐破風部分のみ銅瓦葺だったが（図4）、修理後は全体を銅瓦葺に変えた。仁王門は天正時代のものであったそうだが、新しく建替えられた。2019年9月の台風15号によって境内は再び大きな被害を受け、表門が倒壊し、現在復旧工事中である。

②那古寺観音堂修理工事現場主任（大正9年10月1日～大正10年4月10日、千葉県館山市那古、県指定有形文化財）

那古寺は、館山湾を望む那古山西側中腹に立地し、航海安全の信仰を集めてきた。観音堂は坂東三十三番観音巡礼の結願札所で、本尊千手観世音菩薩を安置する。規模は方5間、棧瓦葺、入母屋造である。現在の建物は、元禄16年（1703）の地震で倒壊後、宝暦8年（1758）に再建された。『那古寺観音堂保存修理工事報告書』（平成20年）によると、大正9年（1920）から3年間の改修で、妻飾を約12cm上げ、軒を45cm伸ばし、内外陣の床板張替え等、大きな改修が行われた。工事完了直後、大正12年（1923）の関東大震災で向拝が崩落し、本屋が傾いたため、翌13年に再び修理をした。

平成15年～20年の半解体修理工事は、大正以来の大掛かりな工事で、大正の改変で軒の出を延ばしたことが観音堂に大きな負担をかけているとして、宝暦8年の姿に復原された。

梅三が関わったのは大正の改修の前半部である。軒を伸ばす改変は、結果として建物にいい影響を与えなかったが、屋根が大きくなるので観音堂がのびやかに見え、濡縁に雨が降りこむのを防げた。巡礼の結願に参る人には好印象であっただろう。



図4 神野寺本堂（左端の建物、台風以前）＊



図5 吉祥寺本堂玄関＊

③日光社寺共同事務所助手（大正10年4月19日～同11年9月29日、栃木県日光市山内）

日光山内は現在、二荒山神社・東照宮・輪王寺の二社一寺に分かれる。これは、明治4年（1871）の神仏分離令を受けてのもので、それまでは日光奉行が江戸幕府によって置かれ、諸堂社の修復・警備・祭祀事務を担った。年中行事も山内で一体に執り行われ、近世の日光山内は、霊峰男体山に抱かれた麓の聖域として幕府の手厚い庇護を受けてきた。

明治に入って幕府の保護を失い、荒廃する日光の社寺建築を保全するため、明治12年（1879）、二社一寺の社寺長職を中心に、町民や幕臣等によって日光保見会が組織され、堂社の修繕にあたった。堂社が古社寺保存法の特別保護建造物となった後も、保見会によって高い修理技術が保持された。保見会は、大正5年に解散するが、引続き大正3年（1914）に設置された日光社寺共同事務所によって修理事業は引き継がれた。現在は、公益財団法人日光社寺文化財保存会がその後継にあたる。

梅三が助手を務めた大正10年（1921）頃の日光社寺共同事務所は、栃木県官民職員録（大正11年）によると、所長が林田虎雄、技師は小林福太郎、顧問は伊藤忠太と大江新太郎である。

④常福寺楼門再建工事現場主任（大正11年10月1日～同12年12月20日、福島県いわき市赤井、昭和8年焼失）

常福寺は、福島県浜通りの南部に位置し、閼伽井嶽薬師と呼ばれる。山火事で度々堂宇を失い、現在の建物はいずれも、昭和8年（1933）11月3日の火災後の再建である。楼門（仁王門）は、参道の階段上にあったが、現在は楼門そのものがない。仁王像は不動堂に安置される。

⑤円覚寺舍利殿取解整理（大正13年1月16日～3月10日、神奈川県鎌倉市山ノ内、国宝）

円覚寺舍利殿は、現存する禅宗様仏殿の代表的な例として、中学校の教科書にも登場する。永禄6年（1563）の円覚寺の火災の後、同じ鎌倉にあった大平寺の仏殿を移築したと推定され、建築年代は15世紀前半と考えられている。詰組の組物が小ぶり、2本の尾垂木とその上の木鼻の線形は、円覚寺舍利殿の特色である。この舍利殿が、大正12年9月1日の関東大震災で、屋根が地面に落ちた姿に大破した。取解（とりとき、とりほどき）は、再び組立てるために部材を丁寧に解体することを指す。

⑥建長寺仏殿・唐門取解整理（大正13年3月21日～5月25日、神奈川県鎌倉市山ノ内、国重要文化財）

建長寺は、寺名の建長5年（1253）に落慶した禅宗寺院である。伽藍の建物配置は、全国に普及した禅宗寺院の規範と考えられている。仏殿は、桁行3間、梁間3間、寄棟造で、裳階の正面に唐破風をつけ、銅瓦葺である。唐門は、桁行1間、梁間1間、向唐門、銅板葺で、全体に黒漆塗りを施し、華やかな金の鍔金具をつける。両建物は、寛永5年（1628）に江戸・芝の増上寺に崇源院（徳川秀忠正室）霊牌所の本殿と門として建てられ、正保の建替えにあたり、正保4年（1647）に建長寺に譲渡された。関東大震災で仏殿と唐門は全壊し、梅三は引続き取解きに関わった。

⑦吉祥寺震災復旧営繕（大正13年5月31日～同14年4月20日、東京都文京区本駒込、昭和20年焼失）

吉祥寺は、曹洞宗の修行所（旃檀林）で、明暦3年（1657）の大火の後、神田駿河台から現在地に伽藍を移した。山門を入った参道の両側に学寮がずらりと建ち並び、千名余の学僧が学んだ。

『震災予防調査会報告第百号』（大正14年3月）によると、吉祥寺は本郷通りに面する境内の北側少しが焼失区域に入るものの、吉祥寺町内の全潰・半潰木造家屋は零件で報告されている。それでも、本堂玄関の倒壊による改築、書院方丈の修繕が発生した。図5は本堂玄関の完成後で、玄関の部材が新しい。袖壁の透かし彫りの菱形は吉祥寺の寺紋である。寺紋は、吉祥寺の名の由来になった、太田道灌の江戸城築城時に吉祥の金印が見つかった井戸の井桁をかたどる。昭和20年（1945）5月25日の空襲で、山門（1802）と経蔵（1804）を残して境内は焼失した。

⑧社寺工務所所員・設計部勤務（大正14年5月2日～、東京都四谷区霞ヶ岡町）、同福岡出張所主任

(大正14年 8月10日～昭和 3 年12月10日、福岡市外宮崎町)、同本所員(昭和 4 年 9 月20日～同 5 年 9 月25日)

社寺工務所は、宮崎宮社家の葦津耕次郎が大正12年 4 月に神社建築工務所として設立したもので、同年 6 月に社寺工務所と改称された⁽⁶⁾。設立の目的は、宮崎宮の修繕を始めとする社寺建築改善と、造営用材に安価な台湾檜材を供給するためであった。社寺工務所の封筒によると、東京市四谷区霞ヶ岡町16番地(明治神宮外苑日本青年館正門前)の他に、鶴見支所(神奈川県)、福岡支所(福岡市外宮崎町)、大阪支所(大阪市湊区小林町)があった。昭和 7 年(1932)に息子の葦津珍彦に経営が引き継がれ、工務所は終戦まで存続した。梅三が勤務するのは、関東大震災の復旧関連工事を経た大正14年(1925) 5 月からで、同 8 月に福岡に赴任する。

⑨宮崎宮本宮境内整理設計・工事監督(大正15年 9 月30日～昭和 3 年12月10日、福岡市東区箱崎、一部現存)、宮崎宮御造営落成奉祝会協賛会理事・海軍博覧会工事課主任(昭和 2 年12月17日～同 3 年 4 月30日)

宮崎宮は、福岡市東部に位置し、勇壮な楼門と朱塗りの本殿、お潮井浜に伸びる800mの参道で知られる。お潮井は箱崎浜の真砂で、7 月のお潮井取りは博多祇園山笠の始まりを告げる。

『宮崎宮誌』(昭和 3 年)によると、明治40年(1907)頃、神域の整理拡張と建造物の修築造営が計画された。第 1 期工事=大正 5 年神饌所竣工、同 6 年拝殿・楼門修営、昭和 2 年(1927)回廊・側門造営。第 2 期工事=大正12年上手水舎、大正15年(1926)絵馬殿・末社 2 棟、昭和 2 年下手水舎・守礼所造営等、第 3 期工事=昭和 2 年東側筋堀・宝物殿造営・貴賓殿及社務所増改築。昭和 3 年(1928) 4 月に御造営落成・落成奉祝海軍博覧会開催。

梅三が関わったのは大正15年に始まった第 3 期工事で、宝物殿、社務所、海軍博覧会会場建設である。宮崎宮権禰宜の田村邦和氏によると、宝物殿は社務所の東隣に2000年頃まであり、社務所の玄関部は今も残る。海軍博覧会は参道途中の参集殿のところにあったのではないかという。博覧会場の建築は、正面長さが18間(36m)もある二重屋根の建築で、軒下にガラス窓がずらりと並ぶ。室内は、潜水艦模型や、軍艦甲板での旗掲揚や甲板洗などのジオラマが展示された。

⑩六殿神社楼門修理工事現場主任(昭和 3 年12月15日～同 4 年 9 月16日、熊本市南区富合町木原、国重要文化財)

六殿神社は、熊本市南部の源為朝が居城したという木原山の北側麓に位置する。楼門は、天文18年(1549)の建築で、3 間 1 戸楼門、入母屋造、茅葺、木部は朱塗りで仕上げる。明治40年に特別保護建

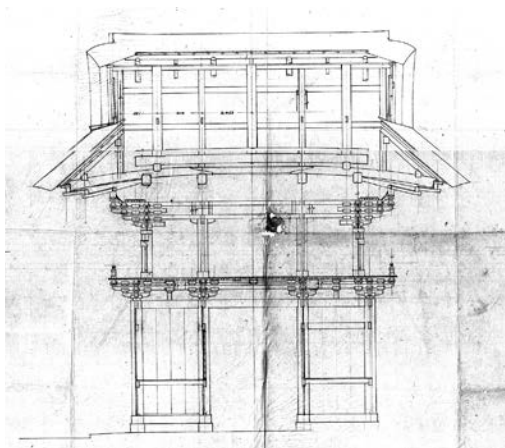


図6 六殿神社楼門桁行断面図*

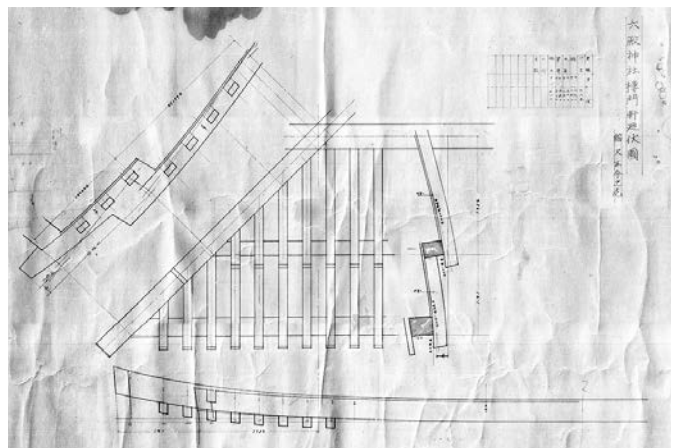


図7 六殿神社楼門軒廻伏図*

造物となり、熊本県で最も早く国の文化財に指定された。

資料で、詳細図面や関連資料が残るのはこの六殿神社からである。35歳になり、梅三が組織での様々な経験を経て、現場主任として独り立ちした頃と想像される。図面は、正面図、側面図、断面図、軒廻伏図が残る（図6・7）。楼門は軒回りの細やかさと華やかさが特色で、軒廻伏図では、隅木と二重垂木の木割や垂木の絶妙な反りが精緻に記されている。

⑪祐徳稲荷神社造営工事監督（昭和5年9月30日～同8年8月2日、佐賀県鹿島市古枝、昭和24年焼失）、同技師・営繕部長（昭和16年10月30日～同21年1月7日）

祐徳稲荷は、鹿島鍋島家直朝夫人で後陽成天皇の曾孫の万子媛が、父の花山院から京都邸内の稲荷大明神の分霊を授与され、貞享4年（1687）に石壁山に勧請したのに始まるという。

祐徳博物館所蔵の明治42年（1909）筆の境内図は、浜川東岸に境内があり、眼鏡橋・社務所・本殿・拝殿の位置は現在と変わらないが、建物は小ぶりで彩色が控えめである。それが、昭和12年（1937）筆の境内図になると、眼鏡橋に朱塗りの欄干が付き、手水舎、石段下の鳥居、拝殿・本殿、社務所と拝殿をつなぐ斜面の渡廊等が整備され、いずれも規模が大きくなり、朱塗りで飾金具をつける。博物館では、大正14年御造営着手、昭和3年御本殿地鎮祭、昭和5年（1930）～8年渡殿・御手水舎・眼鏡橋・丹塗鳥居・浜大鳥居、昭和8年御本殿新築落成とする。

昭和8年4月の『県社祐徳稲荷神社御造営報告書』で梅三は、「大正14年5月神社ヨリ御造営計画ヲ内務技師角南隆氏ニ委嘱アリ、同氏ハ神社側ト重議ノ上、之レガ設計ヲ東京社寺工務所技術部長吉森敏重氏ニ当ラシメ」、「同年7月社殿設計ノ完成ヲ告ゲ、県ノ認可ヲ得テ、実施計確定シ工ヲ起スニ至レリ」、「社殿ハ拝殿ヲ中割式トシ其大体ノ形式ヲ権現造ニ倣ヒ、細部ハ鎌倉、桃山期ノ手法ヲ取入レ努メテ木割ヲ太クシ、其姿態豪壮勇建ノ感アラシメ、而シテ一部ヲ除ク外内外共漆塗り極彩色ヲ施」すと説明する。全体の指揮は角南隆⁽⁷⁾が務め、設計は吉村敏重が担った。西の日光と呼ばれる絢爛な装飾は、このときの整備による。宮崎宮の設計にも角南隆は関わっているので梅三のことは既知で、日光の経験もある梅三は適任だったに違いない。

本殿、拝殿、幣殿、手水舎は総檜造、銅板葺、朱塗極彩色。赤鳥居は鉄筋コンクリート造だった。木材は社寺工務所より台湾阿里山の檜、石材は徳山の花崗岩、工匠長は東京の小林平治郎、石工頭は伊万里の森長兵衛、従業員総数は約10万人に及んだ。梅三は、前任者の後任として昭和5年10月から現場主任、吉森技師の急逝で昭和6年（1931）12月から技師を務めた。昭和8年以降も工事顧問などとして営繕に関わり、戦後まで継続した。境内は昭和24年（1949）の火災で多くが焼失し、梅三が手掛けたもので残るのは若宮社（昭和15年）や御神輿などわずかである（図8・9）。

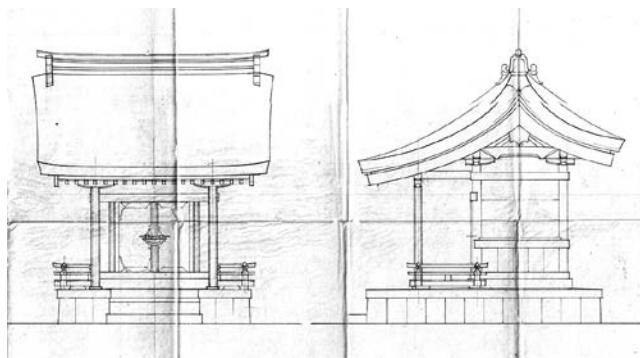


図8 祐徳稲荷神社若宮社、正面・側面図＊

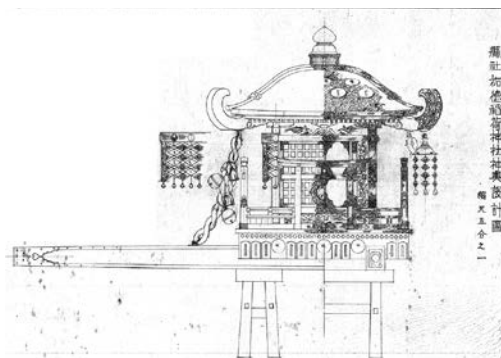


図9 祐徳稲荷神社神輿設計図＊

⑫元広島護国神社造営工事設計その他事務（広島招魂神社、昭和8年8月10日～同9年10月20日、広島市中区基町、昭和20年原爆焼失）

『官祭広島招魂社造営誌』（昭和15年）によると、広島招魂社は戊辰戦争の戦没者を祀るため、明治元年（1868）に二葉山に造営された水草霊社を、明治34年（1901）に広島招魂社と改称。昭和7年、時局博覧会の余剰金を得て市街地移転と陸海軍戦死将兵合祀が計画され、広島市基町の西練兵場西端1500坪に移転改築造営した。昭和8年8月18日起工、翌9年（1934）10月31日竣工、11月7日落成である。

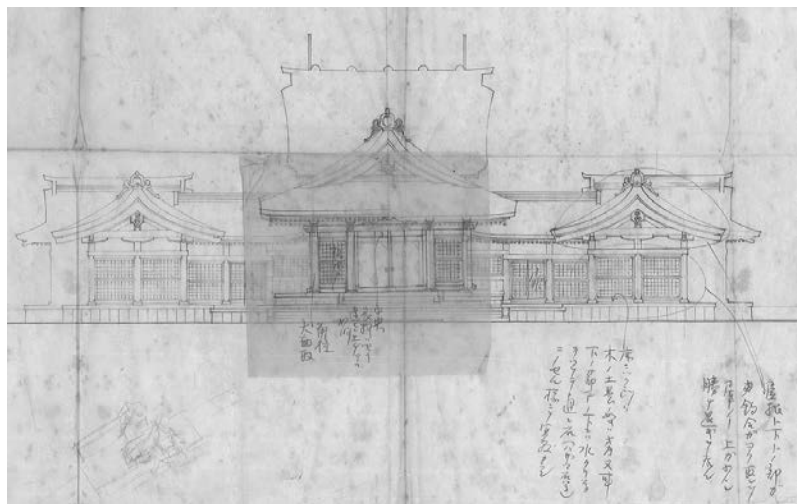


図10 広島招魂神社正面姿図＊
（上：角南隆の指摘の書入れがある初期の図面、下：完成図面）

官祭広島招魂社境内配置図によると、境内は本川東岸に東向きに配置され、流造の神殿を置き、手前に幣殿・拝殿・向拝が続き、方形の石畳の中庭を包んで参列殿を左右に配す。資料には、梅三が角南隆とやり取りした書簡が含まれる。昭和8年9月22日付の書簡で、角南は梅三に、図面に私見を書き入れたので再考してほしいと依頼する。図10上の正面姿図に書き込まれた赤字がそれである。向拝部は、紙を重ねて中央扉に「中央長押ハセイ違ヒシ、上ゲテハ如何」と書き込み、両脇の扉よりも高くするように、左側部戸は「板唐戸」に建具を変更し、柱は「角柱大面取」と柱に大面を取るように指示する。右側の参列殿は「屋根ト下トノ部ガ釣合ガヨク取レテ居ナイ、上ガ少シ勝ち過

ギテ居ル」と屋根と長押下のバランスが取れておらず屋根が勝っている、「床ニツク所ハ木ノ土台ノ如キハオカヌ事、下ノ部戸ノ下ニハ水クリ等ヲツケテ直シ石（ハザマ石等）ニノセル様ニテ宜敷カラシ」と、木の土台が床に直接接しないように指摘する。角南の指摘はいずれも、建物の意匠と維持の面での的確である。指摘は全て反映され、参列殿の建具は唐戸に変更され、屋根廻りもすっきり洗練された（図10下）。続く昭和8年10月4日の書簡では、招魂社の設計であっても実施設計として明細書、釘隠等金具の個数と詳細がわかる図面を完備するように梅三に伝える。受けて、翌11月に建物毎の設計予算、金具の形状・個数・増減・単価・金額を記した書類を作成した。梅三は、内務省技師の角南隆と直接やりとりする役割にあった。

広島招魂社は、原爆ドームの北側道路を挟んで向かい側にあり、現在の広島商工会議所ビルや青少年センターの場所にあった。大鳥居、狛犬、灯籠等の石造物は広島城内の護国神社に移設されて残る。広島平和記念資料館初代館長の長岡省吾氏は、原爆投下2日後、広島護国神社の石灯籠の表面が溶けて針のようになっていることに衝撃を受け、特殊な爆弾だと実感したという⁽⁸⁾。

⑬賀茂別雷神社土ノ屋取解整理事務（昭和9年10月31日～11月30日、京都市北区上賀茂本山町、国重要文化財）

昭和9年9月21日の室戸台風によって、京都市内は大きな被害を受けた。梅三が同年10月から10年間、京都の建築に携わるのは、復旧工事がきっかけである。9月30日付の東京朝日新聞夕刊によると、賀茂別雷神社土屋は全壊の被害だった。土屋の名は、床を張っていないことにちなむ。隣の橋殿と細殿は倒壊していないので、床がなく足元が固まっていないことが被害につながった。土屋は、寛永5年頃の建築で、桁行5間、梁間2間、入母屋造、檜皮葺である。

⑭稲荷神社宮繕事務（昭和9年12月31日～同16年11月15日、京都市伏見区深草藪之内町）、社務所増築工事・史跡荷田春満旧宅修理設計（昭和16年11月16日～同18年3月31日、国史跡）

伏見稲荷も、室戸台風で大鳥居が倒壊する被害が出た。大鳥居再建の棟札写真によると、万延元年（1860）9月建立の大鳥居だったが、大暴風で根元から折れて倒壊したため、柱直径3尺2寸、柱芯々間隔24尺、高さ31尺、台湾檜材で再建。起工は昭和10年（1935）3月20日で、上棟は同年5月10日。技師嘱託に井上梅三の名がある。

資料は他に、社務所増改築、茶席瑞芳軒・残香亭移転、神馬舎周辺工事、権殿北大鳥居、東丸神社、社務所裏護岸工事、参道石灯籠、公衆用仮便所等の図面があり、修繕・土木・便宜施設等幅広く手掛けている。国学者の荷田春満（1669～1736）は、伏見稲荷祠官の羽倉家の生まれで、旧宅は春満の生家として大正11年（1922）に国の史跡になった。東丸神社は春満を祀る。これらの修理設計も一連の宮繕事務だった。

⑮忠清北道清州神社修築工事設計・監督（昭和16年12月20日、忠清北道清州郡清州邑栄町、昭和20年解体）

忠清北道の清州（チョンジュ）は、ソウルから130km南に位置する。清州神社は大正11年に創立され⁽⁹⁾、昭和11年に境内拡張のために牛岩山に遷座され、3月に起工、10月に竣工した⁽¹⁰⁾。このとき、朝鮮神宮と同じ神明造の社殿が並び建った。梅三が関わったのは、遷座から5年後の昭和16年（1941）末である。図面を見ると、既存建物の青焼図面に赤鉛筆で、拝殿と本殿の間に祝詞殿・弁備所・楽舎等を増築するスケッチをしている。完成図面では、拝殿と本殿の間の地盤を一段下げ、前面の石垣も手前に出した修築図面が作られた（図11）。また、拝殿手前に神門・廻廊・授札所の新設、直線500mの参道も設計された（図12）。最終図面の完成は昭和19年（1944）だが、整備後の写真が残るので実施された。跡地は現在、大韓仏教曹溪宗の境内である。参道の階段や本殿と拝殿のあった上中下段の地形は残る。

⑯英彦山神社宮繕技師（昭和17年10月15日～同21年3月31日、福岡県添田町、現存せず）

英彦山は、福岡県添田町と大分県中津市の県境に位置し、修験の山として知られてきた。明治以降は福岡の筑豊炭田地域から崇拝を集め、炭鉱入口には必ず英彦山神社の札が祀られた。

図面と設計書によると、斎館新築、社務所移転改築、社務所増築、手水舎改築などが計画された。日付があるのは社務所玄関・神符授与所増築工事図面（昭和20年8月）と手水舎改築図面（同年9月）である。前者は、奉幣殿の向いに建つ平屋建ての社務所から参道側に突き出して玄関と授与所を増築する。英彦山神宮の山本直也氏によると、昭和54年（1979）頃まで同様の建物があったという。同宮所蔵の『宿直日誌、昭和二十年』10月20日項に上棟祭執行の記事があり、図面の日付から、これが社務所増築工事にあたると考えられる。手水舎は、石段の途中にあり、流造で、建物と水盤が一体になった計画だった。

斎館は、奉幣殿南西の参道石段南側の段差のある敷地に、木造2階建、入母屋造で計画され、玄関に唐破風をつけ、上階に玄関・参籠室を設け、下階に湯沸所・食事室・潔斎室（浴室）を設けた立派な建築である。山本氏によると、下階に炊事場があった新館と呼ばれる建物が境内にあったが、規模は小さかったという。官幣中社は昭和21年（1946）までで、以降の境内整備は見送られたであろう。斎館新築は計画までだった。

⑰琴路神社本殿改築工事設計・監督（昭和18年1月21日～同20年10月31日、佐賀県鹿島市大字納富分、現存）

琴路の風雅な名は、四条天皇が能古見の三嶽神社から琴を溪流に流し、流れ着いたところに下宮として社殿を建てたことに因む。祐徳稲荷神社から北に3kmに位置するので、祐徳稲荷に駐在する梅三に依頼があったのだろう。正面3間、側面2間の流造で、礎石は鉄筋コンクリート造土台の上に据えられる。図面では正面中央扉が唐戸だが、実際は蔀格子戸である。簷股の彫刻が華やかで、図面通り再現されている。

5. おわりに

井上梅三が履歴書で紹介する手掛けた寺院は6カ所、神社は9カ所である。大正14年4月までは東日本の寺院が続き、台風や地震で倒壊した特別保護建造物や国宝建造物の復旧工事の経験を重ねる。大正14年5月に社寺工務所に勤務して以降は、西日本の神社が続き、新築設計の経験を重ねた。社寺工務所を立ち上げた葦津耕次郎が内務省神社局の角南隆と台湾檜の視察を一緒に行く等関係が深かったこと、当時の時局が神社整備に力を入れていたことが背景にある。図面が含まれるものの履歴書にないものに、草戸稲荷神社、高良大社、建部神社等がある。

梅三が手掛けた建築のうち、広島招魂神社は1945年の原爆投下で、清州神社は1945年の終戦で、祐徳稲荷神社は1949年の火災で失われた。資料には、3神社の図面や設計書が初期スケッチから完成まで豊富に含まれる。図面はこれら失われた建物の様相を示す貴重な建築資料である。一般の人に分かりやすい姿にできないかと、現在3神社の3次元復原を進めている（図13・14）。

松江城天守の修理工事を手掛けた時期は、梅三が56～61歳の頃で、本稿で紹介した十分な経験を経て、文化財技術者として充実した時期であった。だからこそ、井上梅三の残した松江城天守昭和修理資料が信頼できるのである。調査にあたりお世話になった諸氏に深く感謝します。

注

- (1) 山田由香里、「昭和解体修理工事資料に基づく松江城天守の再検討」発表、『松江城天守国宝指定記録集、松江城天守国宝へのみち』松江市松江城調査研究室編、2020年7月。
- (2) 資料は廃棄物処分される寸前で、梅田賀千氏ら島根県建築士会江津支部によって救出された。現在の所有

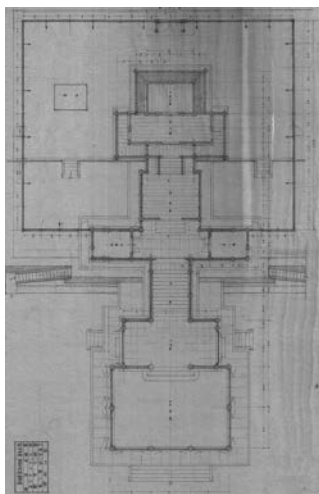


図11 清州神社平面図＊

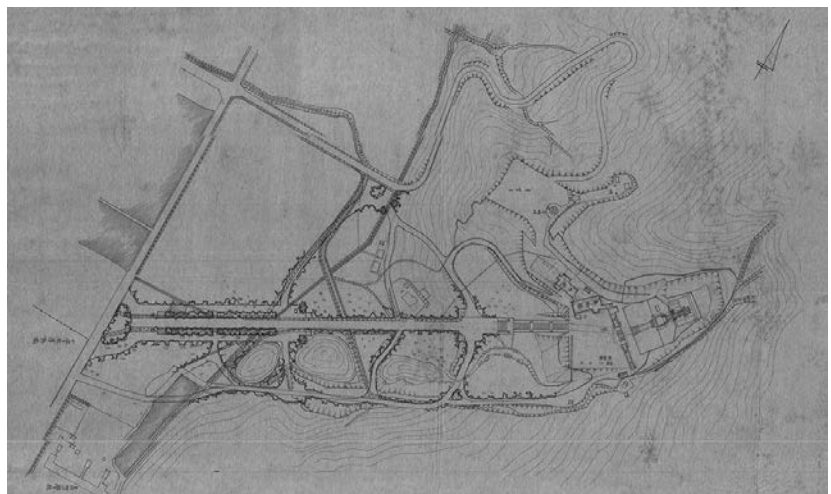


図12 清州神社境内配置図＊

者は井上家御子孫の花田豊子氏で、梅田氏が保管する。＊を付した図・写真は、井上梅三資料。

- (3) 履歴書は昭和20年10月までの戦歴が記され、作成はそれ以降である。時期から、松江城天守の修理工事に携わるために作成したものと思われる。
- (4) 『江津市誌別巻』1982。
- (5) 『私立東京工科学学校学則』による。入学願書の書式見本に大正とあるので、大正期のもの。
- (6) 西矢貴文「事業家としての葦津耕次郎」『明治聖徳記念学会紀要43』明治聖徳記念学会、2006年11月。
- (7) 1887～1980年。1915年東京帝国大学建築学科卒業、1916年明治神宮造営局、1919年内務省神社局、全国の官幣弊社の神社運営・営繕指導・設計・監督に従事。
- (8) 『被爆75年企画展、礎を築く一初代館長長岡省吾の足跡』広島平和記念資料館、2020年7月～21年2月。
- (9) www.himoji.jp、神奈川大学非文字資料研究センター、海外神社（跡地）に関するデータベース。
- (10) www.cbinews.co.kr、2017.10.16記事。

（やまだ ゆかり 長崎総合科学大学工学部教授・松江城調査研究委員会委員）

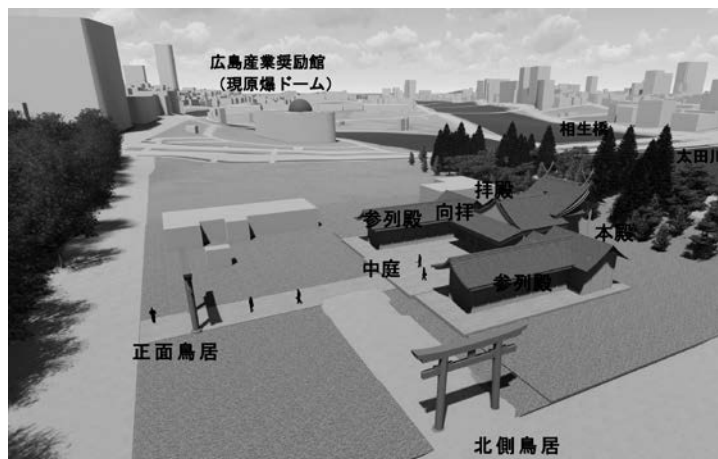


図13 元広島護国神社の3次元復原鳥瞰図（北東から見る。社殿石敷き広さは53m四方。周辺の状況は現在の広島の様子。左背後は原爆ドーム。復原図作成：小西奏流氏）

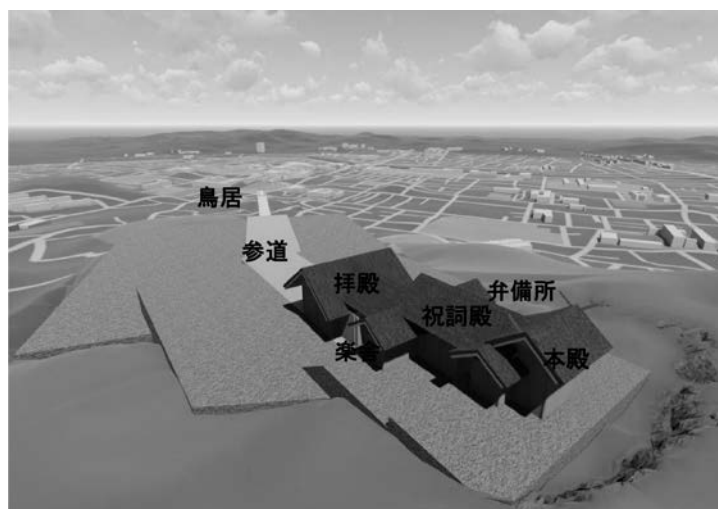


図14 清洲神社の3次元復原鳥瞰図（本殿左背後から見る。本殿から拝殿まで長さ30m。拝殿から鳥居まで500m。復原図作成：小西奏流氏）